



2010. 12. 10

No.164

編集 樋口 みな子

E-mail [minginga@agate.plala.or.jp](mailto:minginga@agate.plala.or.jp)  
<http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150>  
郵便振替「銀河通信」  
02740-7-56535  
(郵送6号分1,000円)

## 2010年を振り返って



11. 25 焼山 (662m) から見た  
冠雪した余市岳と定山溪天狗岳

父は昨年3月に入院してから4度の転院を繰り返して、今年1月に厚別のK病院に落ち着いて11ヶ月になります。落ち着いてはいましたが嚥下障害があり、しよちゅう熱を出して、このままでは肺炎を起こすと医師から説明を受けました。口から食事出来ないのは父が可哀想だなと思いましたが、1日に1回でも食事させて欲しいと希望し11月、胃ろうを造設することに同意しました。胃ろうにする前から全身のかゆみが続いていましたが、肩からの点滴を外したら困ると両手は大きな手袋をはめられ、体を動かす自由を奪われていました。私は背中をかいてあげることしか出来ませんでした。ストレスは大変なものだったと想像できます。胃ろうになって1ヶ月。副作用なのか、皮膚は湿疹

でかぶれていました。88歳の父は見舞いに行くたびに、頬はこけ、足も車いすに乗れないほど、硬直していました。私の問いかけにはうなずくのですが、声を発しにくくなっています。先日、珍しく声を出しました。みな子か？母さんは？直子は？（次女）と聞きました。直は埼玉だから来れないよと言うと寂しそうにうなずきました。誰にでもやってくる老い。私の父だけでなく、あちこちと転院せざるを得なかった高齢者は大勢いらっしゃると思います。家族が看取るのは厳しい事情もあります。高齢者や障害者を大事にする医療に転換して欲しいです。

夏の間、週末か日曜は登山に明け暮れました。この2ヶ月は、病院を往復しながら、読書する日々でした。多田富雄さんの「落葉隻語」を読み、死を意識しながら、強烈ながんの痛みを耐え、日々生き続けたことに胸を突かれました。生きるってつらいですね。

我が家はなんとか元気に過ごせました。夫が自分の好きな分野で力を発揮しているようです。理科の実験に力を入れて、生徒たちも楽しんでいるとか。最近、理科室で暗幕を引いて、天井に発泡スチロールをつるし上げ、プラネタリウムを見せたら大成功したと喜んでいますが。息子はまだ学生。就職が氷河期で進路を模索中です。家族のことは書かないと決めて個人通信にして10数年になります。1年の終わりに家族の近況を書いて見ました。山に快く送り出してもらっているのに、感謝の気持ちを伝えてないなぁと反省しています。

11月27日に北海道高山植物保護ネットの市民フォーラムを開き170人の参加がありホッとしました。11月から雪崩講習会が始まりました。12月は旭岳での講習会が控えています。

今号からタイトルがカラーに変わりました。描いたのはアポイ岳で自然ガイドをしていた住田真樹子さん（札幌在住）です。今年1年間、ご愛読ありがとうございました。2011年も皆さまにとって健康で幸多い年でありますようお願い申し上げます。



12. 2 野幌森林公園の  
アカケラ

# お花畑は、いま・・・



北海道高山植物保護ネット（大原雅代表）の市民フォーラムが11月27日に北大地球環境科学研究院で開催し、170人が参加しました。

礼文島自然情報センターの代表であり、写真家でもある柚田美野里さんは、礼文の高山植物の生息地は、人の暮らしとほぼ同じ高さにあること、そのため自然を守るには理解の輪を広げていくことが大切と語り、特に子ども達が自分を育む自然を理解するこ

とが、大人になったときの自信につながるのではないかと語りました。また道立環境科学センターの宇野裕之さんは、道内の高山帯のシカの調査は始まったばかり。低地帯でのシカの急増を見れば高山帯にシカの被害が増える可能性も高いと語りました。シカは高い妊娠率と牧草地や伐採跡地などの増加で増え続け、狩猟者の高齢化で捕獲数が低下していると説明しました。大学院生の研究発表では、高山帯での高山植物の分布と雪解けとの関係や、性転換するマムシグサなど興味深い話でした。

環境省利尻の自然保護官の岡田伸也さんは、利尻山の登山道補修について発言。水をいनाす近自然工法で登山道の整備を行っているが、歩きやすくとまた登山者が増える。また崩れる。補修するの繰り返しで、登山者からは「歩きやすくしてくれてありがとう」と感謝されるが、もっと登山者自身が登山道を破壊していることを考えて欲しいと結び、私も登山をする者として考えさせられました。植物写真家の梅沢俊さんは2010年に会った花を紹介。ヒダカスミレやニセコレイジンソウなど、高山植物ではないけれど、観察しながら野山を歩く楽しさを伝えてくれました。

今年の4月から代表も事務局長も代わり、テーマも広がり、新鮮な市民フォーラムでした。

## 京極さんが道内1,500m以上峰 夏・冬達成!



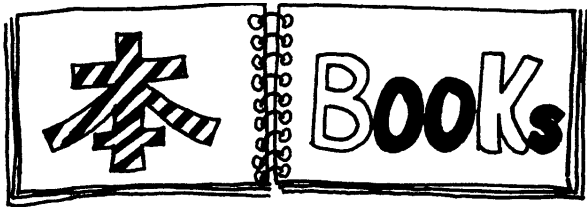
京極統一さんが、25年の歳月をかけて、道内1,500m以上峰150峰の夏・冬達成。祝う会が11月3日に開かれました。道内屈指の登山家や、北海岳友会のメンバーなど85人が参加し京極さんの業績を讃えました。私は京極さんの著書「素晴らしき幸運な登攀」を読んで銀河通信に紹介して以来のおつきあいです。当時の私は山の知識も浅く、ミニヤコンガ偵察隊長を務めたり、カフカズ登山隊長としてシヘリダ北壁クローアル初登攀をした人であることも知りませんでした。数年前に分水嶺踏査で、存分に力を発揮されていましたが、輝かしい業績を自慢したりするような方ではありません。著書でも語っていますが、素晴らしい山仲間と多くの厳しい登攀を共にしました。芦別岳ツルンゼ左股奥壁、利尻山西壁Aフェース等の初登攀などの記録が満載。その時の天気や岩の状態、登攀仲間の名前がたくさん出てきて臨場感があります。

北海学園大学の教授であり、北海岳友会の丸山さんのお祝いの言葉が印象に残りました。「京極さんは強固な基礎技術にイメージーションを働かせて山に登っていた。いつも目をきらきらさせて山の計画を話してくれた」と。同席された奥さまも聞いていて嬉しかったのではと思います。

京極さんが厳しい登攀の合間に遊び心で始めた目標150山は、夏と冬ですから300回になります。目標に向かって根気強く達成したことに敬意を表します。1980年のミニヤコンガ偵察隊に参加した梅沢俊さんが道新に書いた文章が、京極さんが編集した記念誌に収まっています。その時の京極隊長の行動が記されていますので紹介します。「何が何だかわからないまま、あお向けの体勢で暗闇の中を落下し、無重力の、あの不快感を感じた。落ち口の明るい穴が見る間に小さくなっていき、『ああ落ちたんだ』と思った時、大きな重力加速度に逆らう力を体感じた。止まった！隊長がとっさにザイルを巻きつけたピッケルを、雪面に突き刺して止めてくれたのだ。略、ザイルの長さを見ると私は13メートル落下していた。海外で氷雪登山の経験豊富な隊長のおかげで命拾いしたわけである。氷河の魅力と恐ろしさを存分に味わった偵察行であった」。

京極さんは道民カレッジでも「夢を持ち続ければいつか実現する」とカムチャッカの原始の自然の豊かな山を紹介しました。日本山岳会北海道支部の50周年にはカムチャッカの山に登ろうという計画があります。是非登りたいです。

山にはしばらく登っていないので記録はありません。今号は6ページです。その分、本の紹介を詳しくしました。



6月に山仲間のTさんが61歳で急死。11月には児童文学作家であり、自身の悲惨な戦争体験を中高生に語り継ぐ活動もされていた若松みき江さんが73歳で亡くなりました。(2007, 8.5 146号で紹介) 父の老いをみつめ、死を考えさせられた日々でした。読んだ本は偶然ですが、死の直前まで、社会

に発言し続けた方達の本でした。近づく死を意識しながらも発言は少しも後ろ向きではなく、それらの本から生きて行く知恵や勇気をもらいました。お正月、ゆっくり読書はいかがでしょう？



**梅棹忠夫 語る** 聞き手小山修三

**日経プレミアシリーズ 日本経済新聞  
出版社 850円+税**

今年7月に90歳で亡くなられた梅棹氏が、死の直前まで語り尽くした自らの生き方と哲学。登山家であり、探検家であり、動物学者であり、民俗学者であり、文明学者でありと多面的に活躍された梅棹氏。一見、取っつきにくい印象を与えますが、権威を笠に着るのをとても嫌った自由闊達な人でした。

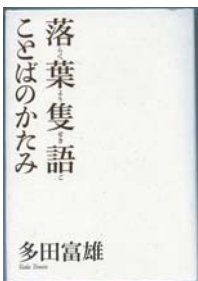
私は岩波新書の「知的生産の技術」を読んだだけですが、この本は関西弁が親しみやすく、まるでその場で対談を聴いているようで楽しかったです。時代の証言者として、本質をついた発言に何度もハッとさせられました。

梅棹氏は徹底して、目と足を使って自分の頭で考えて文章を書いた人でした。難しい文章は書かない、文章を飾らない、一番大事なことは誰にでもわかる文章を書くこと。複文は使わず引用はしない等。自分は芸術家ではないからとはっきり言っています。わかりやすい平明な文章を書く学者は、多くはないですね。インテリに対する批判は痛快。「インテリというのはまさに武士道。サムライの後継者や。それで町民をバカにしとる」「できない人間ほど権威をかざす」と手厳しい。実際、終戦後に大学に復帰した際、教授の絶対的権威をぶち壊さなければならぬと考え、大学院生の立場で教授選に立候補したという経歴の持ち主です。学問から思想は生まれないと世界中を足で歩いて目で確かめました。そして自分の人生を決定しているのは「遊びや」というのです。机上論を信じず、自分のオリジナリティに徹底的にこだわった人でした。

学者としての業績は、著作集23巻にも及びますが、その人生は、挫折とその克服によって全うされた事も語られます。

三校時代、山岳部の部長として年間100日も山に入り放校になり、19歳で復学したり、日本隊が初登頂を果たしたマナスルに参加するつもりが肺結核で2年間の療養生活も経験。66歳で両目の視力を失っています。しかし、梅棹氏は「困難は克服されるためにある」と語るのです。印象に残る言葉はたくさんあるのですが、組織に対する考えは山で鍛えられたと言います。「フォロワーシップを経験してはじめていいリーダーになれる。フォロワーシップとは盲従ではない。自分の意志や判断は持つけれども、隊長には従う。山は危険がいっぱい。時には命にかかわることもあるからな」。今西錦司氏をリーダーとしてのマイクロネシアでの学術探検調査では、氏から行動の判断、フィールドワークを進めながら思索を深めていく手法を骨の髄までたたき込まれたと言います。

メモもきちんと綺麗な字でわかるように書き、スケッチもとても上手です。国立民族博物館で同僚でもあった小山修三氏の率直な問いに、ユーモラスに受け答えしているのも、ずっと心に届きます。この本は現代日本人へのメッセージです。実に面白かった。アツという間に読めますが、その言葉は含蓄があり、私も梅棹氏のように、最後まで人生を楽しみ生ききりたいなと思いました。



**落葉隻語 ことばのかたみ**

**多田富雄著 青土社 1600円+税**

免疫学者として有名だった多田先生。私は40年前、検査技師の学校時代、先生の免疫学の教科書で学びました。今年4月に76歳で亡くなりましたが、死の直前まで温かい医療や福祉を願って書いたのが本書です。

科学者であると同時に文化人であり、リハビリをしながら著述活動を続けました。医療や福祉など日本のあり方に危機感を募らせ、真剣にあるべき姿を論じています。また

若い研究者や次世代にむけたメッセージでもあります。

2001年に、先生は脳梗塞で倒れ、右半身がマヒしました。その上、前立腺がんの転移で、痛さに苦しみながらの執筆です。落葉隻語とは「落ち葉の一言」の意味。パソコンで一文字一文字、力を振り絞って打ちこんだそうです。苦しいけれど、今伝えなくてはという気迫が文章から伝わってきます。第2部の「ことばのかたみ」は親しんできた能のこと、また自身の創作能、常なる人の道への願いなど、死の足音を聞きながら書いた文章が心にしみました。4ページに続く

現代の「娼捨」を憂うで先生はこう書きました。「今、国の政策としての『娼捨』が平然と行われている。リハビリの日数制限はその好例である。略 診療報酬を決めるのは厚労省の権限だが、診療の制限までの権限はないはずだ。治らないからやめろというのは死ねということに他ならない。残された機能を維持するのは大切な治療だ。治療を拒否された患者は『リハビリ難民』と呼ばれた。しかし度重なる請願にも関わらず救いの手は差し伸べられなかった。『難民』は一転して『棄民』になってしまった。現代の娼捨に他ならない」と厳しく糾弾しています。私の父もそうでした。1年間で4度の転院を余儀なくされたのです。

多田先生は闘う人でもありました。「診療報酬を考える会」の仲間と一緒に48万人のリハビリ制限反対署名を集め、車椅子を押して貫って厚労省に署名簿を渡しました。しかし、国は書名を握りつぶし、さらに締め付けを強化したのです。国はここまで冷たくなったのかと愕然としました。

多田先生は生命や原爆をテーマとした新作能を手がけたことでも知られます。学問も含めて生命のありようにこだわり続けた生涯でした。胸をつくのは死をいつも意識しながら、日々を生き続けたことです。「毎食後、必ずやって来る咳と痰の苦しみは筆舌に尽くしがたい。毎日肺炎の危険と戦っているのだ」とあり、声にならない父の苦しみが理解出来ました。

若い時は、覚えることが多すぎて楽しんで学ぶゆとりがなかったけど、大佛次郎賞を受賞した「免疫の意味論」読んでみたいと思います。



単独行者 新・加藤文太郎伝

谷甲州著 山と溪谷社 2625円+税

昭和初期、国内の冬季登攀記録を次々と打ち立てた伝説の登山家、加藤文太郎を描いた小説です。新田次郎の「孤高の人」のモデルになった人物ですが、著者は別の視点から文太郎に迫っています。

当時、登山は大学山岳部が主流で、社会人登山はまれでした。まして冬山山行は、案内人を雇うのが当たり前であった時代に、文太郎はパーティも組まず単独行にこだわりました。最初は里歩き。駅から続く県道をひたすら歩くのです。スピードを決めて、電車の時間に間に合うように歩くのですからかなりの速度です。階段を登るように、小さな山から大きな山へ。そして冬山にのめり込んでいきます。初めて冬山の八ヶ岳で正月を迎えた時の記録には「寒い、寂しい」と書いた文太郎。著者も20代の頃から、ずっと単独行を続けてきて、弱さも不安もさらけ出す文太郎に共感しているのがわかります。文太郎が残した「単独行」は著者の愛読書だったそうです。

文太郎はいくつものパーティに山中で出会っています。かたや大学山岳部。相手にしてもらえませんでした。不器用で人付き合いが下手であったために、単独行を選ぶしかなかったのかもしれませんが。だからこそ、地形や天気を読む力が必然的についたとも言えます。全てが独学。縦走時の食糧も試行錯誤を繰り返して、興味深かったです。甘納豆の汁粉は極上の美味しさとか。今は軽くて栄養価の高い物がたくさんあるけれど、装備を軽くする工夫は並大抵ではなかったと思います。文太郎に自分の姿を投影させているかのように、雪や氷と格闘しながらの登攀の描写がリアルです。

ひよんなことから技術に格差があったメンバーとパーティを組むことになります。これが悲劇を生むことになるのです。冬の槍ヶ岳北鎌尾根で遭難死します。この最後の章に読み進んだのが11月23日。上ホロで雪崩事故が起きて4人の仲間が亡くなった日でした。とても読み進めず中断。翌日、思い直して読み終えましたが、吹雪の中で滑落していく姿が4人の仲間と重なりました。文中には、天候の急変、技量の差による登攀への懸念が、言葉にすることが出来ずに不安を募らせるさまが描かれています。単独であれば途中で撤退することも考えただろうし、天気回復を待つことも出来たのかも知れません。

読み終わって、気が重かった雪崩講習会の講師養成コース。やらなくてはという気持ちに切り替えることが出来ました。

## 笹刈りで汗を流しました

10月16日（土）前日の雨で心配しましたが予定通り、空沼岳分岐から札幌岳縦走路のひょうたん池までの笹刈りを7班、23人で実施。それぞれが300mを受け持ちました。やせ尾根の急斜面で足を滑らせそうなところが何カ所もあり緊張を強いられましたが、私たちの受け持った分はきっちりとやり終えました。というのも、プロが使う業務用の笹刈り機が威力を発揮したからです。先々週ここを縦走した方の話だと、ひょうたん池から豊滝分岐までもかなり生い茂っているようですから、縦走される方はその心積りが必要です。ひょうたん池から先は来年に持ち越されました。分岐に戻り、空身で空岳頂上に登るとニセコの山々や札幌近郊の山、羊蹄山もくっきりと望め素晴らしい眺望を満喫しました。



6:00 真駒内開発局Pに集合 8:00万計山荘出発10:00 笹刈り開始 13:30 笹刈り終了 16:00万計山荘



## イサム・ノグチ 宿命の越境者 上下巻

ドウス・昌代著 講談社文庫 上下巻共752円+税

世界的彫刻家として活躍したイサム・ノグチの波乱に富んだ生涯をドウス・昌代さんが丹念な取材と構成力で描ききったのが本書です。

ドウス・昌代さんは、あとがきで「ある時期から、わたしのなかでくすぶ

る問題意識を、ひとりの人物を徹底的に追う手法で書いてみたいという望みをひそかにつのらせた。そして私はイサム・ノグチという対象に出会った。20世紀において、激しく変動した日本史を身をもって生きたこの芸術家の生涯をたどる作業が、それまでのどの作品をもこえる規模となる予感、はじめからあった」と書いています。

イサム・ノグチは日本人の詩人、野口米次郎とアメリカ人の母レオニー・ギルモアの私生児として1904年にロサンゼルスで生まれます。父は帰国。日露戦争時で日系人が排斥されるようになり、レオニーは2歳の息子連れて異国の日本に渡ります。少年時代のイサムは映画レオニーでも描かれています。（レオニーの生涯を描いた映画は6ページで紹介しています。）イサムが彫刻家になる将来を築ききっかけを作

ったのは、自宅の設計を9歳のイサムにさせた母レオニーでした。戦時中混血児は偏見と差別に苦しめられ、レオニーは将来を考え13歳のイサムを単身でアメリカに送り出します。戦時中で手紙が届かず、母との連絡が途絶えてイサムは後日、母に捨てられたと述懐しています。恩人とも言える後見人のラムリー氏の経済的な援助を受けてコロンビア大学医学部に入学します。レオニーと妹もアメリカに帰国。レオニーはイサムに強く芸術家になるように諭し美術学校に再入学し、彫刻家としての一歩を踏み出します。1924年にはイサム・ノグチとし初の個展を開きますが日米の混血であることによる差別は1945年の終戦までつきまといます。世界的なアーティストとして認められてからも、広島平和祈念碑やジョン・F・ケネディの墓所のデザインが不採用になった時の直接の原因になりました。その時の失意は大きかったようです。しかしアメリカ人でも日本人でもない、どこにも帰属しないという思いが、イサムの創造の原動力にもなって素晴らしい作品を生み出しました。母を捨てた父を憎み、母から自立後は、華麗な恋愛遍歴を重ねました。一度だけ短い結婚をしたのは女優の山口淑子だけです。インタビューに答えた女性は年齢を重ねても皆美しく聡明でした。ドウスさんはアメリカだけでなく、インド、フランス、イタリア、さまざまな国に足を伸ばしてイサムにゆかりの人たちから話を聞き、膨大な資料を読み、多面的で複雑な人間イサムに迫ります。日米の間で苦闘せざる得なかったイサム。面白くてぐいぐい引き込まれました。



11.5 モエレ沼公園の紅葉

香川県の牟礼にも職場を持ちますが、牟礼の裏山はイサムが唯一心安らぐ庭であったのかもしれませんが。死去する8ヶ月前、ニューヨークでの公演で牟礼の裏山についてこう語っています。「裸だった地面には芝生が広がり、いまでは緑の服を着ています。人々が真似のできないやり方で自然が作品を完成させてくれました。（略）天候が木や石と一体になるのを見るのは生命を味わうことです」。

1988年、札幌モエレ沼公園が最後の設計になりました。本を読んで、牟礼の裏山が念頭にあったことがわかりました。「全体をひとつの彫刻とみなした宇宙の庭になるような公園」を天国からレオニーと共に見守っているような気がしました。



## 「セラフィーヌの庭」（仏・独・ベルギー） マルタン・プロヴォスト監督

実在した画家の生涯を描いたのがこの映画です。

セラフィーヌ・ルイ（ヨランド・モロー）は貧しい一人暮らし。パリ郊外の屋敷で家政婦をしながら、花や木をモチーフにした絵を描いていました。貧しくて絵の具が買えず、草木

# 映画

から色を作り出し白の絵の具だけをつけて買います。屋敷に間借りすることになったドイツの画商ウーデ（ウルヒヒ・トゥーケル）にセラフィーヌは絵の才能を認められます。ウーデは経済的援助を約束し、存分に創作出来るようになるのですが、第一次大戦で、ウーデはフランスを離れてしまいます。その後二人は再会しますが、大恐慌でウーデの援助が不可能になります。憑かれたように絵を描き続けるセラフィーヌが心を病んでいくのが悲しい。

花や木に話しかけ描く世界は、生き生きとして力強い。大きな木を抱きしめ、話しかけるヨランド・モローはセラフィーヌの素朴さや優しさを表現し、絵の雰囲気にとってもマッチしていました。女性が画家になるのは困難な時代、無垢で自由な絵を描き続けた女性が存在したことに感動しました。おおらかで美しい色づかいの自然描写が素晴らしい絵も堪能しました。



「ふたたび」 Swing me again

塩屋 俊監督



映画の冒頭は、島の美しい海と夕日に向かって吹く哀愁のあるトランペットの響き。

物語はハンセン病療養所を50年ぶりに退院した78歳の貴島健三郎（財津一郎）が、初めて会った孫の大翔（ひろと）とかつての仲間を訪ねて果たせなかった夢を実現させます。健三郎はジャズトランペット奏者でした。突然の発病で、仲間と別れ、最愛の妻とも引き離されてしまいます。妻は長男を生みますが、家族の偏見から抱くことさえ許されず、若くして亡くなっていました。孫の大翔も大学のサークルでトランペットを吹いていてじいちゃんの夢を実現させようと、仲間を訪ねる旅に出ます。

バンドメンバーはそれぞれに年若い認知症になった人、音楽関係の社長になった人とさまざまな人生を歩んでいましたが、50年前に神戸の名門ジャズクラブ「SONE」でライブをするという約束を誰も忘れてはいませんでした。変わらぬ友情に胸が熱くなりました。老いた4人の渾身の力をこめたジャズ演奏に、心揺さぶられました。健三郎が人間としての尊厳を取り戻した瞬間でした。演奏を聴いているだけで涙があふれてとまりませんでした。

舞台になった療養所は瀬戸内海の大島青松園です。香川本土からは船で結ばれています。

購読料をありがとうございます

10/15~12/3 (敬称略)

助田梨枝子(芽室町) 3000円(カンパ含む) 菅沼宏之(札幌市) 2000円(12号分) 久野真紀子(様似町) 3000円(カンパ含む) 高橋宜也(札幌市) 5000円(カンパ含む) 吉野勝夫(美幌町) 2000円(12号分) 梅沢俊・節子2000円(カンパ含む) カレンダーも 合計17,000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。

逆境の中で天才育てた女性

二一はイサムに芸術の分野で道を切り開いて欲しいと願い、早期教育を開始したことに驚きます。

レオニー

映画紹介

100年前、異国日本で日本人との間に生まれた子どもをひとり育てたレオニー・ギルモアの波乱に満ちた生涯を描きます。後に世界的な彫刻家になったイサム・ノグチの母です。20世紀初頭のニューヨークで、レオニー(エミリー・モーティマー)は詩人、野口米次郎(中村獅童)に編集者として出会います。レオニーは文学で身を立たせたいという希望を持っていました。恋に落ちたレオニーは米次郎の子をみごもりま

すが、米次郎は帰国。時は日露戦争後、レオニーは排日機運が高まる故国を離れ、2歳の息子を連れて日本へ渡ります。しかし米次郎には妻がいまいました。レオニーは不実な米次郎に頼らず、英語教師としてイサムを育てます。未婚の上に異国で差別と偏見の目にさらされながらの子育てはどんなに困難だったか。

9歳のイサムが茅ヶ崎で母と共同で設計した三角形の家づくり。丸窓からは富士山が見えました。レオニーは自立と孤独感、親子の絆、教育問題――松井久子監督は、運命を受け入れ、たくましく生きるレオニーの姿を詩情豊かに描きます。英国出身のエミリー・モーティマーはアイランドの血が流れるレオニー役にぴったり。理知的でつつまじやかに複雑な人間性を演じ、共感の涙を禁じ得ませんでした。

ラストにイサム・ノグチが設計した札幌モエレ沼公園で嬉々として遊ぶ子どもたちが映し出されます。私も初めて訪ねてみました。モエレ沼の自然の復元と周辺景観の調和が配慮されていて、シラカバやカラマツの紅葉の美しさに目を奪われました。モエレ山からは手稲山や百松沢山、神威岳などが一望できます。イサムは縦横無尽に駆け回る子どもの視点を大切にしながら、空から鳥の目で全体を把握しているのです。国や地域の枠を超えて「人間の気持ち」を表現する越境者に育てたいと願ったレオニーの思いを具現しているのがモエレ沼公園のような気がします。(樋口みな子) 札幌シネマフロンティアで11月20日から上映。

158号（2009.10.10）発行の銀河通信で久保俊治さんの「罨撃ち」を紹介しました。ハンターと罨との息詰まるような対峙と、素晴らしい自然描写に圧倒されました。十分に伝え切れませんでした。何人かの読者から「あの本は面白かった」と感想が寄せられました。家族も揃って読んだ本です。私は映画が好きですのでまるで目の前にその場面が見えるようで、久保さんの観察力に感動しました。番外編ですが、読者であり、山の仲間である大船さんの投稿をご紹介します。

## 「罨撃ち」と日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか

銀河通信でも紹介された「罨撃ち」は、自然の山野の中にごめく野生の匂いを感じる稀有の物語です。久しぶりで、わくわくする本に出会ったものです。数年に一度程度落ち合って酒を飲み交わす学生時代からの友人Tに、この「罨撃ち」を紹介したところ、意外な反応に出くわしました。「罨撃ち」は、「遠野物語」から「日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか」に続く作品である、というのです。遠野物語はさておいて、この指摘には面食らいました。

「罨撃ち」が面白いと紹介してくれたのも、会社勤め時代の友人Hです。退職するころに、山に登りだしたのですが、もう一緒に山に行くこともなくなってしまいました。でも、自然に対する思いは、共通していると見えて、自然の楽しみ方についてカタリながら、たまには酒を呑むという、得がたい友人です。彼が語りたかったことは、久保俊治が「罨撃ち」で示してくれた、紛れもなく日本に今、埋もれかけている「ウィルダネス」の存在です。罨を追って山野を駆け巡る気分は、われわれが望む自然愛護そのものの情念のように思われました。少し違いますが、マリリン・モンローの映画「帰らざる河」が示してくれたのも、アメリカの「ウィルダネス」でした。澄み切った空気、少し埃っぽい草いきれ、など、われわれの体臭のようなものでした。（「帰らざる河」は、モンローの魅力のために、ウィルダネスを背景にしつらえています。ここでは、この映画の主演女優の魅力を語っているわけではありません。背景にある自然や西部開拓の時代の気分を見ていただきたい。=念のために=）

ただ、この二つ「罨撃ち」と「帰らざる河」が示しているものが、まったく異なったものであることを、内山節「日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか」が教えてくれました。学生時代からの友人Tは、ウィルダネスのことではなく、日本人の文化/ 宗教/ 精神史の観点からこの2作品の関連を指摘してくれたようです。前段にある「遠野物語」から引き継ぐのは、民衆の中に生きる動物たちの〔悪さも、良さもある〕行いなのでしょう。日本人＝民衆は、自然とどのように付き合ってきたのか、が彼の主要な関心事でした。「キツネに騙される」という話が、昭和40年（1965年）頃を境にして、まったく聞かれなくなってしまった。その背景に何があるのかを、内山節は、語ってくれています。いろいろの事柄が関連してあると指摘されています。ここでの文脈でいえば、自然を愛しんで自然と共生してきた社会の崩壊のこと、その社会、文化が、日本人が持ってきた自然の感性、宗教観、と関連してあるのだという指摘でした。ですから、「罨撃ち」は、獲物を仕留めることで、現代的な動物との係わり合いを示しています。そして、「帰らざる河」で、主人公がプーマと闘ったことと同じではないのです。

翻って私自身の自然〔保護〕観です。自然の問題や、森のことも「キツネにだまされた」時代の情念・感性というか、気分支配されているという気がします。山ですれ違う登山者に、わたしは、ご苦労様、と挨拶していました。子供のころ、山では皆そのようにして、今でもその言葉が出ます。そんな挨拶をされると、人によっては苦笑します。なぜご苦労様なのか、と思うのでしょうか。それは「お参り、ご苦労様」なのです。山、自然、神の棲家、多神教的な神の影を、わたしは感じているのです。わたしは、ヒマラヤのような高山域に、すごいな、美しいなとは思いますが、魅力を感じませんでした。わたし自身の山とのかかわり方が、日本の山の、神様との付き合いなのです。ヒマラヤの神々しいまでの稜線にも、ヒンズーやラマの神はいるのでしょうか。同じ多神教でも、別の神々なのかもしれません。皆さんは違和感はありませんか。クマの棲む自然はいい自然だと思います。野ウサギやオコジョに会うといい気分になります。ミヤマアケボノソウの閉じた花びらの間からオシベがきちっと伸びているのを見ると、君もそんなに頑張っているのかと、感動します。ウィルダネスを護る、日本のウィルダネスにあるクマの足跡におびえたり、キツネに騙された話を半分不審げに聴いたり、のほうがちかちかというところに着けるのです。（尾瀬よ、いつまでも）を否定したりしませんが、更に一層《日本のウィルダネスよ、いつまでも》なのです。

大船武彦 東京都立川市（日本山岳会会員）